

座談会

多様な業種で展開する グループ各社の環境への取り組み

運輸・ショッピングセンター・小売・不動産・清掃・設備保守など、JR東日本グループの業種は多岐にわたります。各社が自社の事業の特徴を活かし、「事業活動と環境保護の両立」に向け、取り組みを進めています。特徴的な取り組みを進めるグループ4社と協議会の環境責任者からその取り組みをうかがいました。

屋上に“緑”を敷きつめよう

——ジェイアール東日本コンサルタンツ(株)では、施設的环境負荷削減をテーマに、「屋上緑化」を進めていますね。

大口 はい。2004年に着手して、現在では駅ビルをはじめとするグループ会社など11カ所の屋上を緑化しています。



駅ビルなどの屋上緑化を推進(ルミネ北千住店)

大口 豊氏
ジェイアール東日本コンサルタンツ(株)
企画部長



めとするグループ会社など11カ所の屋上を緑化しています。今日、ヒートアイランド現象が都市部の環境問題となっています。JR東日本グループの環境活動としても資する、建設コンサルタントの事業として着目したのが

屋上緑化。そもそも駅ビルなど、JR東日本グループは多くの“候補地”をすでに持っていたのです。

——すでに緑化による効果が、いくつか生まれているとか。

大口 まず、空調の省エネ効果。緑地帯がビルの断熱材になるのです。さらに人々の憩いの場所として、建物の魅力向上にも寄与します。また、水よりも軽い特殊な養土を使うことにより、既存構造のまま、緑化ができます。

——11カ所への導入ということですが、苦労は？

大口 ええ、やはり駅ビル各社にとってはコストがかかるため、当初は何回も足を運んで説明する必要がありました。ただ、早い段階で、(株)ルミネにご理解いただき導入できた結果、他社の導入も推進することができました。

今後は、環境負荷の少ないエコステーションの提案などにも挑戦していきたいと思います。

レジ袋から「エコバッグ」へ

——流通や小売が多いJR東日本グループでは廃棄物の削減が課題ですが、東日本キヨスク(株)(現：(株)JR東日本リテールネット)の取り組みをお聞かせください。

山本 駅のコンビニエンスストアであるNEWDAYSでは、

5周年記念として「Suicaエコバッグキャンペーン」を行いました。

これは、日本で年間300億枚も使い捨てられるというレジ袋を少しでも減らせればと、リデュース(ゴミをつくらぬ)という考えのもとに、何度でも使える布袋をつくって提供しようという試みでした。配るだけでなく、バッグ持参の方へ割引ポイントを進呈するフォロー・キャンペーンも実施しました。

——NEWDAYSでは、地道な環境活動にも熱心ですね。

山本 とても小さなアイデアなのですが、電飾看板の内側に反射板を貼って、従来の1/2の蛍光灯で同じ明るさになるよう工夫をしたり、レジ袋についてはミクロン単位で薄くしたり地道な活動を進めています。また、食品リサイクルにも取り組みはじめました。店舗だけでなくオフィスでも「ムリ・ムダを無くそう」と見直しを進め、省エネや廃棄物削減に取り組んでいます。



山本 信也氏
東日本キヨスク(株)(現：(株)JR東日本リテールネット)経営企画部長

“草の根”環境マネジメント

——(株)ジェイアール宇都宮企画開発は、全従業員で取り組む「環境マネジメント」に取り組んできました。

関谷 「JR東日本エコ活動」*を参考に、うちでも何かできないかな? というのがきっかけでした。弊社は大宮・宇都



関谷 寛氏
(株)ジェイアール宇都宮企画開発 総務部長

宮地域での駅構内店舗の運営などを事業としていますが、店舗に話を持っていく前に、まずはオフィスから取り組みました。節電、コピー紙の再利用、ゴミの分別。そして社員への情報提供として、手作りのA4判の情報紙に、目標やメッセー



ジ、際立った活動の紹介を盛り込み、発信していきました。地道な成果が“数値”として実を結ぶことで、全員のモチベーションが高まっていったのだと思います。2005年には取締役会で「環境問題への取り組み」を決議、全店舗で目標を定め環境活動を進めることとしました。

そうして、いざフタを開けてみると…店同士が連携し、食べ残しの処理法、廃油の処理方法などを自主的な勉強会で研究しあう。パートさんが自宅へ帰ってからもゴミの分別を徹底する、といった嬉しい波及効果が生まれてきました。情報紙に掲載する話題もどんどん増え、いまでは月に3~4回発行することもあるほどです。

* JR東日本が推進する各職場での環境活動。社員一人ひとりが意識を持って身近な環境負荷削減に取り組み、環境への“気づきと実践”を推進する。

車両の美しさと環境保全の両立

——JR東日本仙台エリアの車両の清掃・整備を担う(株)ジェイアールテクノサービス仙台では、環境負荷を低減した洗剤の開発導入で実績があがったそうですね。

咲山 洗剤は強い薬ほどよく落ちますが、環境負荷や清掃員の健康に与える影響も踏まえ、もっと洗剤を改良していくべきではないかと考えました。環境負荷の高い成分であるシュウ酸をターゲットにして、この含有率を極力減らしながら自然界に存在する成分を活用して洗浄力を維持する、という課題にサプライヤー（洗剤メーカー）と共同で取り組んでいったのです。

——その過程で入念なテストを繰り返したわけですね。

咲山 はい。試験過程では泡切れが悪かったり、洗いムラの発生などの問題点に対し、試行錯誤しながら試作品の製造・試験・改良を繰り返しました。この結果、安全かつ実用性の高い洗剤が生まれました。結果として、

JR東日本がこの洗剤を推奨し、各エリアの車両洗浄でも使用されるようになってきたのがうれしいです。

咲山 武司氏
(株)ジェイアールテクノサービス仙台
企画部長(現:同社監査役)



車両洗浄時に使用する洗剤の化学物質を削減

次の“食品ゴミのリサイクル”

——では最後にJR東日本駅ビル協議会で進めている「食品ゴミのリサイクル」の新しい取り組みについて伺います。

小林 JR東日本グループの駅ビル各社を中心に、JR東日本駅ビル協議会として、共通の課題などに対し連携をとって活動しています。「環境保全」も大きなテーマです。特に、駅ビルなどで飲食サービスを営む私たちには、食品ゴミのリサイクルが課題となっています。ただ、駅ビルには多種多様な飲食店が入っており、そこから出る食品ゴミも、実にさまざま。なかには異物や、硬くて容易に粉砕できない



小林 茂允氏
JR東日本駅ビル協議会食品リサイクル検討幹事会 主査
(株)ジェイアール東日本都市開発 研究開発主幹

ものも混ざっています。そこで私たちは、「バイオ複合型生ゴミ処理機」という新しい装置に着目し、2004年から試験導入を進めてきました。

——ゴミの分別にかかる負担が、ほとんどなくなるのだからか。

小林 そうです。生ゴミはもちろん、生ゴミに付着したビニールや白色トレイなども、一緒に処理します。しかも新しい技術によって処理後は“炭”になり、JR東日本グループや他社へ燃料として供給することもできるのです。

これまでの生ゴミが、家畜の飼料や肥料へのリサイクルが多く、使い先の確保に苦労があったことを考えれば、進化といえるでしょう。また将来的には、この技術を核に、グループ会社や地域を束ねたエコ・システムづくりへと、大きく拡げていきたいですね。

——同感です。幸い私たちJR東日本グループには、多くの関連する会社があり、そのチームワークを活かしてリデュース、リユース、リサイクル(3R)を進める素地があります。つまり企業のスケールメリットを、環境活動へ結びつけることができるのです。ぜひとも、こうしたシナジーの“芽”を、未来へと大きく花開かせたいものです。みなさま、今日はありがとうございました。

2007年5月28日 於 JR東日本本社ビル会議室

司会：JR東日本 経営企画部(環境経営) 担当部長 土屋 忠巳
(現：JR東日本 水戸支社長)